＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
大石　玄（おおいし げん）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】海上護衛戦
【著者】大井篤
【発行】角川文庫（2014年、初出は1953年）

「海の上での戦争」と言われて、いったいどのようなものを思い浮かべるでしょうか。おそらく多くの人が想起するのは、戦艦大和のような軍艦が大砲を撃ち合う砲撃戦か、あるいは、真珠湾攻撃のような航空機と艦船との争いでありましょう。事実、このような《艦隊決戦》を至上とするのが大日本帝国海軍の本流でありました。

しかし、本書が綴るのは、そうした華々しい戦争ではありません。石油も食料も塩までも輸入に依存していた日本が無謀な戦争に突入した結果、海戦から３年を経過した頃には輸送船が次々と沈められたために貿易ができない状態に陥っていました。ようやく海軍は昭和18年11月になって海上護衛司令部を創設し、通商保護に乗り出すことになるのですが、その際に作戦参謀として配属されたのが本書の著者である大井提督でありました。

海上交通路（シーレーン）に対する見識を持たぬ指導者によって戦争が始められたところで兵站（ロジスティクス）の確保に奮闘しなければならなくなった当事者の回想は、経済という面から戦争の実態を教えてくれることでしょう。

【書名】イニュニック［生命］／ノーザンライツ
【著者】星野道夫
【発行】新潮文庫

写真家であり探検家であり文筆家でもある著者は、大学在学中に見たアラスカの写真集でみた場所を訪れてみたいと切望し、手紙を書いた。写真に添えられたキャプションを手がかりにShishmaref宛てとし、誰も知っている人がいなかったので「村長（Mayor）へ」とだけ書き添えた。返事が届いたのは半年後。それが縁となり、著者はエスキモーの家族のところへホームステイすることになり、夏の３か月をアラスカで過ごした。以来、43歳のときに事故で亡くなるまでの間、北極圏の手つかずの風景を写真に残し、そこに生きる人々の姿を文章としてしたためた。

ここでは存命中に編まれた短編集を代表作として掲げましたが、写真集も多数出版されています。文章は苦手という方には、フォトエッセイ『Michio's Northern Dreams〈1〉オーロラの彼方へ』を手に取り、極北に瞬くノーザンライツ（＝オーロラ）を眺めてみて欲しい。私たちは今、地球に暮らしていることに思いを馳せることができます。

《さまざまな人生の岐路に立った時、人の言葉ではなく、
いつか見た風景に励まされたりすることがきっとある。》

——同書帯より引用

【書名】氷菓／愚者のエンドロール／クドリャフカの順番／遠まわりする雛／ふたりの距離の概算／いまさら翼といわれても
【著者】米澤穂信
【発行】角川文庫

推理小説の始まりとされるのは、1841年にエドガー・アラン・ポーが著した『モルグ街の殺人』。この題名が如実に示しているように、一般的に推理小説は殺人事件の謎を追うものであると捉えられているものと思います。しかしながら「ミステリー」の中には犯罪を題材とせず、人が死なない《日常の謎》というジャンルがあります。日常生活の中に潜む些細な謎を解明する系譜としては、北村薫の〈円紫さん〉シリーズ、三上延の〈ビブリア古書堂〉シリーズなどがありますが、ここでは米澤穂信の〈古典部〉シリーズをご紹介しましょう。

「やらなくてもいいことなら、やらない。やらなければいけないことは手短に」をモットーとする少年・折木奉太郎は、かつて姉が在籍していた「古典部」存続のために入部を余儀なくされる。そこで出会った好奇心旺盛な少女・千反田える、それに伊原摩耶花と福部里志を加えた4人が遭遇する学園生活に潜む謎。それぞれに葛藤を抱えた主人公らによる青春群像劇になっています。2012年には、京都アニメーションによりテレビアニメも制作されました。

《青春は、やさしいだけじゃない。痛い、だけでもない。》

——アニメの告知文より